

公開シンポジウム 「家族における父親」の感想

阪 彩子¹⁾
村井 陽之¹⁾

今回のシンポジウムのテーマを知った時、どうして「家族における父親」が取り上げられるのかよく分からないままに、霊長類学・人類学がご専門の山極寿一先生と精神分析学・心理学がご専門の妙木浩之先生という異色の組み合わせに惹かれ、シンポジウムに参加した。

先生方のご講演を聴いて全体として感じたのは、臨床心理学を志す学徒として避けて通ることのできない「家族」について、筆者が如何にこれまで無関心で、問題意識を持つとしなかったかということである。例えば、山極先生の話の中で、家族は社会学的父親を創造することによって成立したと考えられること、家族は人類の歩みが始まって以来の文化であるという説明があったが、これまで家族の起源について考えたことがなかったので、家族という形態がこれほど長い歴史を持つことに驚いたし、妙木先生の話の中で出てきた産業革命以降の核家族化が、我々の根源に関わる大きな問題であるということも今回はじめて知った。そして産業構造の変化に伴い、“男は稼ぎに出て、女は家庭で家事・育児に専念する”という伝統的な性役割や親役割も変化しつつあり、新しい父親の在り方を探索することが真に必要となりつつあるため、今回のシンポジウムのテーマとして「家族における父親」が取り上げられもしたのであるかと思いついた。このように今回のシンポジウムを通して、筆者は多くのことを知り、関心を持つことができたわけであるが、このことは筆者に限らず、シンポジウムに参加した多くの学生にも当てはまることであろう。

今回のシンポジウムを機に、分かりにくかったことが分かりやすくなったということもあ

る。ライフサイクル論で知られる精神分析家のエリクソンが成人期の発達課題として「世代性」を取り上げているが、世話をすることがどうして克服すべき危機・課題とされているのか、換言すれば、成人がいかに世話をするかということが人格の発達とどうつながるのかが分かりにくかったのであるが、これは筆者が子供を持つてば誰でも親になれると思いついていた節があり、この思い込みが理解を妨げていたと分かった。いま思うと、育児不安に悩む親からの相談が多々あることを知っていたが、子どもを持つてば親になれると思いついていたというのは、我ながら奇妙な感じではあるが、これも物事への関心の向け方や問題意識の持ち方と関連しているのかもしれない。

この親になるということに関して、柏木(1993)は、「男性も女性も子どもをもって初めて「父親で“ある”」「母親で“ある”」ことができる。しかしそれだけでは親に“なる”ことはできない。」と述べている。子どもを持つたからといって、すぐに親になれるわけではないというのである。この親に“なる”という考え方はとても興味深い。というのは、この親に“なる”という考え方の中には、親として子育てにかかわる経験を親の発達の問題としてとらえているからである。「子どもとの日々の交流の積み重ね、楽しくもまた苦しくもある子育ての過程のなかで、親である人はさまざまなことを学び、また鍛えられる。これによって親で“ある”ことから、“親らしく”させられ、親と“なる”。親は子を援助し育てるだけではない、子によって親は育てられ支えられ成長してゆく」(柏木,1993)とし、従来の子ども中心の発達研究から親の発達の問題をも取り上げ、

1) 京都文教大学大学院臨床心理学研究科

親一子の相互的な発達を強調しているのである。この相互的な発達は、親一子に限らず、セラピスト―クライアントや教師―生徒など、さまざまな場面において、さまざまな関係の中で経験されるであろう。クライアントに気づかされ、教えられてセラピストとして成長した経験を持つ心理臨床家は多いだろうし、またクライアントに教えてもらうという姿勢はセラピストとして忘れてはならない基本的態度のはずである。

さてここで、山極先生の話の中で、ゴリラの父親も人間の父親も雄が生後に学習する文化的な構築物であるという説明と柏木（1993）の親に“なる”という考え方の接点に気づく。つまり、どちらの考え方も父親になるには学習することが必要であるとしている点である。このように、霊長類学・人類学と生涯発達心理学、そして精神分析学など異分野とみなされている学問にも接点があり、関連していることが分かる。今回のシンポジウムの中でも、学問を隔てる垣根は何かということで、この点がディスカッションされていたが、それぞれの学問で用語やアプローチの仕方に違いはあっても、問題にしている現象は同じであるという話があり、学問の独立性が強調されがちな現状を思い面白かった。

同じことは、今回、父親の在り方・子どもとの関わり方の話の中で取り上げられていた遊びということについても言える。山極先生によれば、サル社会にも遊びのような関係が見られるという。ここでいう遊びのような関係とは、非日常であるという相互認知の上で、大人の雄が子どもと一緒に即興的に共存に必要なルールを伝えていくという説明であった。臨床心理学の世界でも、プレイセラピーという遊びを媒介にした心理臨床活動があることから分かるように、遊びは非常になじみ深いものである。妙木先生がプレイのゲーム化、ないしは臨床の中

での第三者性の必要を述べておられるが、このことは、例えばプレイセラピーや心理臨床場面における「制限」と置き換えて考えることができるのではないだろうか。例えば飽田（1999）は、制限について「単にある行動をやめさせる以上に、人間としてしても良いことと、いけないことをわきまえるという、大きな目標のある行為ではないかと考えているが、一般に心理臨床で制限が話題となる場合、「制限を加える」とか「制限を設定する」というような表現がなされること多く、来談者が自らの行動を律するという意味よりも、第三者が“治療関係の限界を示すもの”といった他律的なニュアンスが強く感じられる」と述べている。こうしてみると、人間の社会でもサルの社会でも共存に向けてのルール作り、換言すれば、制限がいかに大切かということが分かる。

先に学問を隔てる垣根ということに触れたが、この垣根も言わば制限である。それぞれの学問領域の中で適応していくには、この垣根を破らない方が良いのかもしれない。しかし、今回のシンポジウムのように垣根を超えた交流によって得られるものも多いだろう。我々の社会は複雑で、何が適応的なのかは分かりにくい。少なくとも垣根（制限）を意識しながらもこだわりすぎない柔軟な姿勢を保って行きたいものである。そのためにも、今後また今回のような異色とされている研究者同士の交流の場が設けられることが望まれる。

文献

飽田典子

1999. 遊戯法 子どもの心理臨床入門 新曜社

柏木恵子（編）

1993. 父親の発達心理学―父性の現在とその周辺
川島書店